



双書 マルクス主義と統計

1

『資本論』と統計

マールィー著／是永純弘 監訳

大月書店

双書 マルクス主義と統計 1

資本論』と統計

マールイー著／是永純弘監訳

大月書店

訳者紹介

是永純弘	北海道大学経済学部教授
青柳和身	鹿児島経済大学経済学部助手
岩井 浩	関西大学経済学部教授
泉 弘志	大阪経済大学経済学部助教授
桂 昭政	桃山学院大学経済学部助教授
杉森晃一	岡山大学人文学部助教授
近 昭夫	静岡大学人文学部助教授
野澤正徳	京都大学経済学部助教授

双書 マルクス主義と統計 1 『資本論』と統計

1980年2月28日第1刷発行

¥ 2000

監訳者◎ 是 永 純 弘

発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大 月 書 店 印刷 太平印刷

製本 田中製本

電話 (営業)813-4651 (編集)814-2931 振替 東京 3-16387

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

凡 例

一 本書は、イ・ゲ・マールイー著『カール・マルクスの「資本論」における統計の諸問題』、「スタティスティカ」出版所、モスクワ、一九六七年 (M. I. Matij, Вопросы статистики в "Капитале" Карла Маркса, Издательство "Статистика", Москва, 1967) の全訳である。

一 原文がイタリック体の箇所には、訳文では傍点を付し、ゴシック体の箇所は、訳文でもゴシック体にした。

一 原書の脚注は、訳文ではパラグラフごとに該当箇所に(1)、(2)……を付し、各パラグラフ末にその説明文をおいた。

一 訳者による簡単な補注は、本文該当箇所に「」に入れて示した。

一 著書、論文、雑誌、新聞名には『』を、引用文には「」を用いた。

一 マルクス、エンゲルス、レーニンの著作からの引用は、おおむね大月書店刊の『マルクス・レーニン全集』および『レーニン全集』によっている。引用箇所の表示にさいして、たんに『全集』と記してあるのは前者をさし、『レーニン全集』と記してあるのは後者のことである。

なお、原書で用いられているロシア語版『マルクス・レーニン全集』(第二版)と邦訳『マルクス・レーニン全集』とのあいだに明らかな相違がある場合(主として、編集上の相違やマルクスの原テキストの誤りの訂正、あるいはロシア語版の誤植と思われるような場合は、邦訳『全集』の底本であるドイツ社刊のドイツ語版『全集』によって翻訳した。

一 文献注のうち、原書がロシア語文献のものはそのまま訳し、邦訳書がある場合はそれを付した。それ以外の文献については、邦訳書のあるものはそれによって示し、ないものは原語で示した。

なお、引用文は、邦訳書のある場合でも、かならずしもそれに従っていない。

一 本書の原訳は、近昭夫(はしがき、第一章)、杉森晃一(第二章)、岩井浩(第三章)、野澤正徳(第四章一、二、むすび)、泉弘志(第四章三)、青柳和身(同四)、桂昭政(同五)が担当し、是永純弘が全体の校閲・統一をおこなった。

目次

凡例	I
はしがき	一
第一章 『資本論』第一部公刊前のマルクスの著作と統計	六
一 一九世紀四〇年代の著作における統計の諸問題	六
二 一九世紀五〇年代の著作における統計の諸問題	七
三 一九世紀六〇年代の著作における統計の諸問題	三
第二章 統計の一般的諸問題、当時の社会統計とマルクス。『資本論』の統計的基礎	全
一 統計学の対象、課題、意義	全
二 マルクスと経済学研究における数学的方法の役割	全
三 マルクスと当時の社会統計	一〇〇
四 『資本論』の統計的基礎	一〇〇
第三章 マルクスの『資本論』における平均値、相対量、絶対量	二七
一 大数法則とマルクス	二七

二	マルクスによる平均値の特徴づけ。平均値の諸形態とマルクス……………	三九
三	『資本論』における絶対量と相対量……………	一六
第四章	『資本論』における経済統計の諸問題……………	一七
一	人口統計の諸問題……………	一五
二	労働統計と生活水準統計の諸問題……………	一九
三	工業の発展と集積にかんする統計の諸問題……………	三〇
四	農業統計の諸問題……………	四〇
五	経済の国際比較の諸問題……………	六一
むすび	……………	七三
監訳者あとがき	……………	七九

はし が き

偉大な経済学的思想の所産である『資本論』の第一部が公刊された日から、一九六七年で一〇〇年の歳月がすぎた。一八六七年の八月一六日深夜二時、マルクスはその友であり戦友であつたエンゲルスにあてて書いている。「ちょうどいまこの本の最後のボーンゲン（第四九）の校正をすませたところだ。……序文もきのう校正して返送した。つまり、この巻は完成したのだ。ただ君に感謝する。これができたということを！ 僕のために君が身を犠牲にしてくれなかつたら、僕はこの途方もない大仕事を三巻にすることはとうていできなかったのだ。僕は君を抱きしめる、感謝にあふれて！……さようなら、わが敬愛する友よ！」と（一）。

（一）『マルクス・エンゲルス全集』、第二版（ロシア語）、第三一卷、二七五ページ（邦訳『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店刊）、第三二巻、二七〇—二七四ページ。以下、原書では、このロシア語版第二版からの引用は、巻数とページ数の略記により表示されているが、本訳書では、邦訳版のみで表示する。例えば、『全集』第三二巻、二七〇—二七四ページ）。

一カ月後の一八六七年九月、『資本論』第一部は公刊された。「きつと、これまでにブルジョア（土地所有者をも含めて）の頭に投げつけられた最も恐ろしいつづて」『全集』第三二巻、四四九ページは、こうしてなげかけられたのである。『資本論』に秘められていたこの革命的な威力は、人類のいま一人の天才、レーニンの著作と活動によって倍加された。『資本論』第一部の公刊後ちようど五〇年目に、マルクスが科学的にその歴史的必然性を確証した事実、つまり、詩人ヴェ・プリュソフの言葉でいえば、「地上最大の記念すべき事柄」である大十月社会主義革命が遂行さ

れたのは、きわめて意味深い時の一致である。一九六七年、すべての進歩的な人類が、この大革命の五〇年と『資本論』第一部公刊一〇〇年をむかえたのである。

マルクスの『資本論』が巨大な力をもってきたこと、そして現にもっていることにとって、大きな役割をになっているのは、マルクスの科学的な一般化が、全体として相互の関連においてとらえられた、正確で疑問の余地のない事実にもとづいているという点である。一八九四年、『人民の友』とは何か、かれらはどのようにに社会民主主義者とたがっているか?』という著作で、レーニンは指摘している。マルクスの功績は、ダーウインのそれと比較することが、まったく当をえており、『資本論』は、いくつかの相互にきわめて緊密に関連した概括的な観念、モンブラン山ともいうべき多量の事実資料に仕上げをあたえる観念にほかならないと(1)。モンブラン山ともいうべき多量のこの事実材料、経済学的で社会的な一般化のこの土台の主要な要素となったのは、統計資料である。

(1) 『レーニン全集』第一巻、一三四ページ参照。

科学的な一般化のこうした土台を創り出すこと、これはマルクスのおこなった実に偉大な仕事の成果である。レーニンによるとすでに前世紀の四〇年代にマルクスが社会学に唯物論の思想を導入したが、当時はまだそれは仮説であった。彼は書いている。この仮説を提唱したマルクスは、素材の事実的研究にとりかかり、「ひとつの経済的社会構成体——商品経済制度について膨大な資料にもとづき(この資料を彼は二五年以上も研究したのだ)、この構成体の機能と発展との法則をきわめて詳細に分析している」(1)と。

(1) 『レーニン全集』第一巻、一三四ページ。

マルクスとエンゲルスは、『資本論』として結実した研究にとつての統計資料の重要性をたびたび強調するとともに、これらの資料を集めこれを加工する仕事は『資本論』第一部の公刊後にもつづけられたということを強調している。

『資本論』第一部の第一版への序文でマルクスは、ドイツその他の大陸ヨーロッパ諸国の社会統計が、イギリスのものに比べると貧弱であることを残念に思うと述べている(『全集』第二三卷a、九ページ)。マルクスが『資本論』第一部で広く利用したのは、イギリスの社会統計であった。

『資本論』第一部の第二版(一八七三年刊)を準備していたマルクスは、本文にいくつかの重大な修正を加えただけでなく、それにいくつかの統計資料にかんするものも含む事実による補足を加え、新しい統計材料をとり入れた(例えば、『全集』第二三卷a、五四四―五四五、五八四ページ、同第二三卷b、九二二ページその他参照)。

マルクスは、新しい統計材料をとり入れるための大作業を、一八七二年から一八七五年にかけて分冊で刊行された『資本論』第一部のフランス語版の準備中にもおこなった。フランス語版への後記にマルクスは(一八七五年四月二八日付で)こう書いている。「しかし、この改訂の仕事をやりだしてからは、底本にした原本(ドイツ語第二版)にも改訂を加えることになってしまった。すなわち、いくつかの説明は簡単にし、他のものは完全にし、補足となる歴史的または統計的材料を与え、批判的な記述をつけ加えるなどした」(『全集』第二三卷a、二五ページ)。

マルクスの死後に公刊された『資本論』第一部の第三版への後記で、エンゲルスは、マルクスが第一部の本文の大部分を書きなおすつもりであった、とくに「最近までの歴史のおよび統計的材料を補うつもりだった」、と書いている(『全集』第二三卷a、二二六ページ)。しかしながら、この予定のすべてをなしとげることがマルクスにはできなかった。エンゲルスはさらに書いている。マルクスがのこした書物のなかには、フランス語版にあるいくつかの修正や引用のついている『資本論』のドイツ語版や、マルクスが新しい版で利用しようと思った部分の全部が指摘されているフランス語本もあったと。エンゲルスは、これらの書き込みや補足を『資本論』第一部の対応する箇所にとり入れたのである。

マルクスは、『資本論』第三部の仕上げにあたって、とくに地代の問題を研究するさいにも、膨大な統計材料を利

用するつもりであった。『資本論』第三部への序文（一八九四年）でエンゲルスが書いているように、マルクスは、地代にかんする篇のために、七〇年代にまったく新たな特殊研究をなしとげていたのであり、地代にかんする篇の新たな改訂のために抜き書きを使用しようと思つて、数年来ロシアの土地所有にかんする統計資料やその他の公刊物を研究していたのである。「ロシアでは土地所有の形態も農耕生産者の搾取の形態も多様だったので、地代にかんする篇では、第一部の工業賃労働のところでイギリスが演じたのと同じ役割をロシアが演ずるはずだったのである。残念なことには、彼にとつてはこの計画はついに実現されなかったのである」（『全集』第二五卷a、一二二ページ）（一）。このくだりを書いているとき、ロシアでは、マルクスの偉大な弟子であり、その仕事の後継者であるレーニンが、すでにロシアの農業における資本主義の発達についての研究をはじめていたことを、エンゲルスはまだ知らなかった。その後、レーニンは、ロシアだけではなく、西ヨーロッパ、アメリカ合衆国の農業制度についても、全面的な研究をおこなった。

（一）これらの研究のうち初期のものいくつかの成果は、一九四八年—一九五五年に『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』の第XI、XII、XIII巻で公刊されているが、本書では後に考察する。

『資本論』で利用された統計材料、そこで適用された統計資料の加工と分析の方法、マルクスが提唱した統計の理論と方法論の主要問題についての原則的な諸命題、これらはすべて、レーニンがふれているあの、二五年以上のあいだの事実材料の研究や巨大な分量の資料の研究の成果のひとつである。ここで指摘しておかなければならないが、資本主義諸国とくにイギリスの経済についての膨大な統計資料の研究を、マルクスはただ『資本論』を準備する過程で直接におこなっただけではなく、他の研究のなかでもおこなったのである。マルクスは、『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙への多年にわたる寄稿について、一八五九年に、『経済学批判のために』の序言のなかで書いているが、これにかんして彼はとくに多くの統計材料を研究しているのである。マルクスはとくにこう書いている、

「イギリスおよび大陸における顕著な経済的諸事件にかんする論説が私の寄稿の重要な部分をなしていたので、私は、経済学という本来の科学の領域外にある実際上の詳細事にも精通せざるをえなくなった」（『全集』第一三巻、九ページ）と。

こうして、われわれは『資本論』における統計の問題の考察に先立って、『資本論』第一部が公刊される以前の時期の、統計の分野でのマルクスの研究を概観しておこう。こうした諸研究について調べ、ついで『資本論』そのものの統計学の問題についてのマルクスの研究について調べてみると、マルクスの著作、とりわけ『資本論』において現代の統計学の基盤がいかにして創られはじめたかがわかる。レーニンが書いているように、「マルクスは（大文字ではじまる『著書としての』『論理学』はのこさなかったとはいえ、『資本論』の論理学をのこした）ものである。われわれもまた、きわめて確実な根拠をもって、こういうことができる。すなわち、マルクスは統計学にかんして専門の労作をのこしはしなかったが、『資本論』における統計学の問題の研究、この科学への基本的で革命的な寄与を、はたす研究をわれわれにのこしてくれたのである。本書のねらいはこうした諸問題の考察にある。

（一）『レーニン全集』第三八巻、二八八ページ。

第一章 『資本論』第一部公刊前のマルクスの著作と統計

一 一九世紀四〇年代の著作における統計の諸問題

マルクスが統計について述べた初期のものは、一八四二年の春のものであるが、それは深い感動を与える。初期の論稿『第六回ライン州議会の議事（出版の自由と州議會議事の公表とについての討論）』において、マルクスは『アルゲマイネ・プロイシッシェ・シュターツ・ツァイトウング』紙にのった一論文『祖国の新聞と祖国の統計』を批判し、嘲笑している。この新聞がローレンツ・オーケン——マルクスの皮肉な紹介によると「かつて動物界等々にみられるもろもろの差異を、数の系列にあらわそうとした近代の大自然哲学者」——の思想の影響下にあると指摘して、マルクスは憤慨すると同時にまた皮肉をこめて書いている。「統計学こそは最初の政治科学である。ある人間の頭は何本毛がはえているかを知れば、その人間の頭脳を知ったことになる。……統計がどんなに明確であるか、どんな算術計算がそれ以上のまわりくどい精神的操作をどんなに不要にするかを、みたまえ！ だから、計算したまえ！ 数字の表は、公衆の激情をたかぶらせずに、彼らにおしえる」『全集』第一卷、三三ページ」と。

(1) このことは、ローレンツ・オーケンの功績をすこしもひくめるものではない。その功績については、のちにエンゲルスが

『反デュリング論』と『自然の弁証法』で注目している『全集』第三〇巻、一二、三〇、三四九、五一四、五一六ページ参照。

ごらんのように、まだ専門的に経済問題にも統計にもかかわっていなかった若きマルクスは、統計を弁証的な目的でその当時（二五年前）利用した、そしてまた現在利用するやり口に注意しているのである。これは、社会・経済分析をたんなる算術計算におきかえるというやり口であり、読者の激情をたかぶらせずに、彼に教えるように作られた統計表で問題を示すことに、外見上の完全さと客観性を与えることなのである。

このマルクスの指摘は、レーニンが一九一二年にベ・エヌ・クニポヴィチにあてて書いた次のことと同じ趣旨のものと考えられる。すなわち、レーニンは、社会・経済的な型が数字の列の背後に隠れて見失われる危険が、「統計資料の性質からしてきわめて大きいのです。『数字の列』に気をとられます。……わが国の『講壇』は、こうして、資料の生きた、マルクス主義的な内容を無条件に圧殺しています。階級闘争を数字の列のなかにおぼれさせています」①と書いている。レーニンがここで明らかにしたのは、統計材料がその性質からして、社会的な型を忘れさせ、数字の列の背後にそれを隠すことを可能にするということである。数字の列は、完全に網羅的で公正に見える外観を与えつつ、社会・経済的な型を隠すのであるが、ブルジョア的な経済学者や統計学者は、弁護を目的にして、この危険を利用して、数字の列のなかで、統計材料の生きた、真の内容を圧殺し、公衆の激情をたかぶらせずに、彼らに「おしえる」のである。マルクスとレーニンは、こうした「学識ある」欺瞞の正体を暴露する偉大な大家であった。

（１）『レーニン全集』第三五巻、二三三ページ。

マルクスは二年後に、『一八四四年経済学哲学手稿』への準備資料において、リカードからの抜粋にたいして注記した部分で、平均値の問題にふれているが、これはきわめて興味深いものである。マルクスは、リカード学派の私たちの平均数、平均値の扱い方をはげしく批判して書いている。「これらの平均数は何を証明するのか。人間はますます捨象され、現実の生活はますます脇におしやられ、考察されるのは（ただ）、物質的な、非人間的な所有の抽象

的な運動(だけ)である。平均数は、個々の現実の個人にたいする明白な侮辱であり、嘲笑である」。すこしあとにつづけて、マルクスは書いている。「だから、リカード学派にとって肝要なのは、一般的法則だけである。それがどのように貫徹されるか、そのために数千人の人々が破滅するかどうかということとは、法則にとっても、国民経済学にとっても、まったくどうでもよいことなのである。いうまでもないことだが、国民経済学がその一切の奇蹟をよびおこすのにもちいる命題は、すなわちある生産価格の損失は他の生産物の利得によって平均され、したがって、社会はなんら失うものがないという命題は、ある個人の利害と他の個人の利害とが、社会の利害と個々人の利害とが同一になる場合、一般に、個々人の利害または生産が社会的である場合にかぎって、実在的な意味をもち、感性的で現実的な真理である。この場合、社会を一個の人格とみなしうるかぎりでは、社会は一方で失うものを他方でとりもどすのである。しかしながら、私的所有、すなわち敵対的に分裂した利害が前提されるときには、上記の命題は、個人の捨象という意味しかもたない。均衡とはけつして資本家と個人を捨象した抽象的な資本と労働との均衡ではない。これと同様に社会もなんらかの平均数になりうるのである」(1)。

(1) デ・イ・ローゼンベルグ『一九世紀四〇年代のマルクス・エンゲルスの経済学説発展概説』、モスクワ、ソ連邦科学アカデミー出版所、一九五四年、七六―七七ページ〔副題種典訳『初期マルクス経済学説の形成』(改訳版、上巻、一九七六年、大月書店、一一二―一一三ページ)およびア・イ・マールイシ『マルクス経済学の形成』、モスクワ、政治図書出版所、一九六六年、七五ページ〕。〔引用文の最後の文章は、"Wie die Gesellschaft nur eine Durchschnittszahl ist" (「あたかも社会はたんなる平均にすぎないように」) となっている (Marx-Engels Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 3, SS. 556-558)。ロシア語訳では、「平均になりうる」というニュアンスで訳されている〕。

このように、マルクスは平均法や平均値そのものの一連の重要な特徴を強調したのである。彼はいう、平均値は抽象化の結果であり、そこでは偏倚が均らなされており、平均値は社会においておこなわれる客観的な過程とかく結び

ついている。リカード学派にみられたような平均値の解釈にたいする批判も興味深い。この批判に含まれていることのすべてが、そのままマルクス・レーニン主義の平均値観にとりいれられたのではないが、資本と労働という二つの敵対者が平均値において均等化されると考えるのは正しくないということについてのマルクスの基本的批判的な命題、敵対的な性格をもつブルジョア社会もまたなんらかの平均数に転化することができるということについての基本的批判的な命題——この基本的批判的な命題は、根拠のない架空の平均値を認めがたいとする命題として、マルクスとレーニンが創造した統計理論の基盤に、確実にとりいれられたのである。

『経済学・哲学手稿』において注目されるのは、マルクスの次のような主張である。すなわち、ブルジョア経済学は、資本もなければ土地もなく、ただ自分の労働によってしか生きてゆけない人を、「労働者」としてのみ見ている……それは労働者をその失業状態において見ないし、人間として見ることはしないのであり、この見方を刑事裁判所、医者、宗教、統計表、政治、そして食糧係の警官に委ねるのである」(1)。このようにマルクスは、ブルジョア統計では労働者としての労働者に注意がはらわれていないことを指摘するとともに、人間としての労働者にかんするすべてのことが、とくに統計とその表に委ねられていることをも指摘しているのである。統計の弁護的な利用についての、前にみたマルクスの皮肉な指摘(「数字の表は公衆の激情をたかぶらせずに、彼らにおしえる」を思い出すならば、失業しているときの労働者について考えることは統計表に委ねられるとしたマルクスが示唆する志向、つまり、ブルジョア統計の表で、労働者を人間として表わすという志向も理解されよう。

(1) マルクス・エンゲルス『初期著作集』、国立政治図書出版部、モスクワ、一九五六年、五二九ページ『全集』第四〇巻、三九六ページ。

マルクスとエンゲルスの最初の共同著作『聖家族』、別名 批判的批判の批判 ブルーノ・パウアーとその伴侶を駁す』にも、統計の問題と統計資料の利用法について、興味深い原理的な考察が含まれている。J・ファウヒャーの論

文『イギリスの時事問題』を批判して、エンゲルスは書いている。この論文の筆者が問題にしているのは、一一シリリングという賃金のひとつの率だけであるが、「実際には、イギリスの工場には一シリリング半から四〇シリリングおよびそれ以上までいろいろ賃金、等級がある」『全集』第二卷、九ページと。賃金についての根拠のない資料へのこの批判には、根拠のない平均値の悪用は認めがたいとしたマルクスのさきに見た考察の発展がみとめられる。

マルクスは『聖家族』で、統計資料とそれをもとにした計算を援用し、当時の有名なフランスの作家ウジェーヌ・シューのセンチメンタルでプチブル的なユートピアに壊滅的な批判を与えた。シューの作品『パリの秘密』は、パウアーの新聞（周知のように『聖家族』はその立場に反対して書かれた）が、まるでなにか新しい社会的発見でもあるかのように熱狂したものであった。

このユートピアの一端は、労働者の大半が住んでいたパリ第七区での貧民銀行の設立である。この銀行の年収は、一万二〇〇フランで、失業者への貸付は、失業期間を一六週間とみて、三〇フランであった。マルクスがまず第一に明らかにしたのは、パリ第七区の「貧困」と公認された労働者の数は、少なくとも四〇〇〇人であるが、この社会空想家の予定した基金から援助されるのはわずかに四〇〇人（一万二〇〇フラン÷三〇フラン＝四〇〇）であるから、援助されるのは、第七区の最も救援を必要とする労働者の一〇分の一にすぎないことになるということである『全集』第二卷、二〇九ページ参照。同時に、マルクスはドイツの哲学者が絶賛したこのフランスの作家のユートピアが予定する救援額が極端に少なすぎることも明らかにしている。まず第一に、マルクスは指摘する。パリでは失業期間の平均は四ヵ月つまり一六週（想定された援助期間）以上である。ところが、わずか三〇フランを一六週に分けると一日二七サンティムにもならない。この援助計画の規模がいかに小さいものであったかは、マルクスの次のような比較と計算から明らかにする。「フランスでは四人、一人あたり、一日の経費は平均四七サンティム強で、そのうち食費だけで三〇サンティム以上控除される」。だがルドルフ氏『パリの秘密』の作中人物の一人でこの貧民銀行

の創設者」の援助する労働者には家族がある。一家族平均で夫婦のほかは子供が二人しかいないとしても、二七サンティムを四人でわけなければならなくなる」『全集』第二卷、二〇九ページ。この点についてレーニンは、『聖家族』の摘要のなかで、「マルクスは計画の数字をとりあげ、窮乏にくらべてそれがみすばらしいことをしめしている」と書いている。レーニンが指摘しているのは、貧民銀行はその思想からいって貯蓄銀行以上のところは何も無いということである(2)。貯蓄銀行の問題については、あとでとりあげよう。

(1) 『資本論』でもマルクスは、四人と労働者の消費水準を比較していることに注意されたい『全集』第三卷b、八七五、八八六ページ参照。

(2) 『レーニン全集』第三八卷、二九ページ。

方法論の面からみて興味深いのは、マルクスが、計算と比較にいくつかの平均指標を用いていること(平均失業期間、平均家族数、したがって、当時すでに正しく算定された平均値には証明力があるということ)を明らかにした点である。

マルクスは統計計算によって、別のユートピア的構想、つまりブークヴァルの模範農場——そこでの労働者の毎日の肉消費量は一ポンドとされていた——創設の構想が成り立たないことを明らかにしている。マルクスは指摘している。実際、フランスで生産される肉が平等に分配されるとすれば、一人当り一日四分の一ポンドにもならないのである、当時のフランスで農業に従事する人口数が総人口の三分の二であったことを考えるならば(本書二八ページ参照)、容易にわかるように、このユートピアが実現されたら、「農業人口だけでも、フランス全体で生産されるよりも多くの肉をたべることになり、そこでフランスはこの批判的改革によって、すっかり畜産業をなくすことになる」『全集』第二卷、二一一ページと。このように、統計資料にもとづくわずかな計算によって、マルクスは、社会改革の計画が根拠のない無責任なものであることを解明しつつしている。